

# Joan G. Robinsonの*When Marnie Was There* における出遭いと少女の成長

笹田裕子

**要旨** イギリスの児童文学作家・挿絵画家である Joan G. Robinson (1910-88) は、作家自身の娘 Deborah のテディベアについて書かれた *Teddy Robinson* シリーズ (1953-64) や、5人兄妹の末っ子が主人公の *Mary-Mary* (1957-60) など、幼い子ども読者を対象とした短編物語集で知られる。これらの作品では、挿絵も Robinson 自身が描いている。また、Joan Gale Thomas という別の筆名で何冊かキリスト教に関する本も手がけた。前掲作品に比べると年長の子どもの向けに書かれた *When Marnie Was There* (1967) は、カーネギー賞ショートリストに挙げられた作品である。1960年代に出版された作品でありながら、本作品には1950年代のファンタジー作品との共通点が見られる。

本稿では、*When Marnie Was There* の主要な要素である、主人公が過去と遭遇する特別な場所、子ども主人公にとっての愛する対象、孤立と成長について考察する。場所と少女主人公について論じる際には、本作品の舞台を北海道に移し、2014年に公開されたスタジオジブリ制作のアニメーション映画『思い出のマーニー』にも言及する。

最終的に、本作品の主題ともいえる、常に輪の「外側」(outside) にいる、すなわち孤立していると感じていた少女主人公が、他者を愛し自分も愛されるといふ経験を契機として成長する過程について明らかにしていく。

キーワード：過去との出遭い、愛する対象、孤立

## Encounter and Self-development of the Girl Protagonist in Joan G. Robinson's *When Marnie Was There*

SASADA Hiroko

**Abstract** Joan G. Robinson (1910-88) was a British children's writer and illustrator who created several well-known works for young child readers. These included works such as *Teddy Robinson* series (1953-64) about her daughter Deborah's teddy bear and *Mary-Mary* books (1957-60) about the youngest girl in a family with five children. Robinson herself illustrated these works. She also wrote some religious books under another pen name, Joan Gale Thomas. *When Marnie Was There* (1967), which was written for older children, was shortlisted for the

Carnegie medal. Although it was published in the 1960s, *When Marnie Was There* shows a lot of similarities to fantasy works of the 1950s.

In this article, the significant aspects of *When Marnie Was There* are discussed: the specific place where the girl protagonist encounters the past; the child protagonist's object of love, and growing up through isolation. In the discussion of the place and the girl protagonist, the Ghibli animated film released in 2014, *When Marnie Was There* (original Japanese title: *Omoide no Mani*) is referred to. Through this, the article explores the process of self-development the isolated girl protagonist undergoes, which is caused by the experience of loving the other and being loved in return.

**Keywords:** encounter with the past, object of love, isolation

イギリスの児童文学作家Joan G(ale) (Mary) Robinson (1910-88) は、作家自身の娘Deborahのテディベアについて書かれた*Teddy Robinson* シリーズ(1953-64) や、5人兄妹の末っ子が主人公の*Mary-Mary* (1957-60) など、幼い子ども読者を対象とした短編物語集で知られる。<sup>1)</sup> 挿絵画家でもあるRobinsonは、他の作家の作品の挿絵を担当したこともある。前掲作品の挿絵も作家自身が手がけている。少し年長の読者向けに書かれた*When Marnie Was There* (1967)<sup>2)</sup> は、カーネギー賞ショートリストに挙げられた作品である。1960年代に出版された本作品には、英米児童文学「第二黄金期」に入る1950年代のファンタジー作品との共通点が見られる。

本稿は、*When Marnie Was There*の主要な要素と思われる、主人公が過去と遭遇する特別な場所、子ども主人公にとっての愛する対象、孤立と成長についての考察である。場所と少女主人公について論じる際には、本作品の舞台を北海道に移し、2014年に公開されたスタジオジブリ制作のアニメーション映画『思い出のマーニー』にも言及する。すべての論考を通して、本作品の主題ともいえる、常に輪の「外側」(outside)にいる、すなわち孤立していると感じていた少女主人公が、他者を愛し自分も他者から愛されるという経験を契機として成長する過程について、最終的に明らかにしていく。

## 1. 過去へと誘う場所

*When Marnie Was There*は、1人の少女に働きかける力をもつ場所を描いたことから、比類なき名作であると高く評価されている。<sup>3)</sup> この作品の舞台となるのは、Robinson一家が夏に訪れた場所Norfolkである。*When Marnie Was There*は1960年代の作品だが、その先行作品にあたる1950年代の代表的ファン

タジー作品に通ずるものがある。過去と現在をつなぐ場所として、実在の場所や古い館を舞台にしていることは、例えば、Lucy Mary Boston (1892-1990) 作 *The Children of Green-Knowe* (1954) や Philippa Pearce (1920-2006) 作 *Tom's Midnight Garden* (1958) といった作品との最大の共通点であるといえよう。<sup>4)</sup> Green-Knoweは作者が購入して住んだ12世紀に建てられたマナーハウスを模した館であり、*Tom's Midnight Garden* の主人公Tomが一時滞在するおじとお婆のアパートは元は古い館であった。しかも、Bostonが住んだマナーハウスも現存する。<sup>5)</sup> また、*Marnie*の舞台となるNorfolkと同様、Tomに登場するもお屋敷だったアパートがあるElyも実在の地名である。三宅興子は、いずれの作品でも舞台となる古い館について、実在する場所や地名が特定できることによって、ファンタジー作品に現実性を与えることを指摘している。<sup>6)</sup>

*When Marnie Was There*の主人公Annaは、ひと足早く始まった夏の休暇の間滞在するPeg夫妻の家から、初めて散歩に出かけ近くの入り江を訪れた時、偶然the Marsh Houseを見つけ、ひと目で惹かれる。

And then she saw the house . . .

As soon as she saw it Anna knew that this was what she had been looking for. The house, which faced straight on to the creek, was large and old and square, its many small windows framed in faded blue wood work. No wonder she had felt she was being watched with all those windows staring at her!<sup>7)</sup>

これは、何にも関心を示さなかったAnnaが心を動かされた瞬間でもある。この後、Annaは毎日のようにthe Marsh Houseのことを考え、そこに住む人々のことを想像し始め、足繁く訪れるようになる。*Tom's Midnight Garden*の主人公Tomが「真夜中の庭」を毎晩訪れるようになるのと同じである。

さらに、前掲の1950年代のファンタジー作品とは、古い館で子ども主人公が過去と遭遇することも共通している。*The Children of Green-Knowe*では、少年主人公Toseland (愛称Tolly) が、300年前ペストで亡くなった子ども達の霊と出逢い、*Tom's Midnight Garden*では、アパートの広間にある古い振り子時計が13回鳴った後夜の間だけ現れる庭で、Tomが19世紀の少女Hattyに出遭う。同様に、the Marsh Houseで、Annaは過去に実在した少女Marnieと出遭うのである。

宮崎駿も *When Marnie Was There*におけるthe Marsh Houseの重要性を指摘している<sup>8)</sup> が、スタジオジブリが手がけたアニメーション映画『思い出のマー

ニー』<sup>9)</sup>でも、この屋敷は入念に再現されたことが分かる。<sup>10)</sup>ジブリ作品では舞台は北海道に移され、<sup>11)</sup>ジブリ版では、the Marsh Houseは長い間外国人の別荘として使われていた通称「湿っ地屋敷」という洋館で今は空き家であり、1930年代に建てられたという設定になっている。<sup>12)</sup>

## 2. 愛する対象との出遭い

*When Marnie Was There*で特別な場所として登場するthe Marsh Houseにて、過去と遭遇するAnnaは、同時に愛する対象を見つけることになる。幼い読者向け<sup>13)</sup>のRobinson作品に登場する幼女たちの傍らにも愛する対象が存在する。Teddy Robinsonシリーズの主人公である幼いDeborahにとっては、Teddy Robinsonがかけがえのない存在である。例えば、うっかり一晩中Teddy Robinsonを庭に置き忘れてしまう羽目になったDeborahは、翌朝早く大急ぎで「はだしで、しかもパジャマのまま」(with bare feet, and in her pyjamas)探しに行く。<sup>14)</sup>何かにつけ、2人の兄と2人の姉の4人がかりで小言を言われる末っ子Mary-Maryにとって、唯一のよき理解者はおもちゃのネズミMoppetである。<sup>15)</sup>これらのおもちゃは、D. W. Winnicottが「過渡的对象」(transitional objects)に関する理論を考える契機となったWinnie-the-Poohを想起させる。<sup>16)</sup>過渡的对象は通例、つかの間にして永遠に愛する対象となる存在<sup>17)</sup>である。

既に幼児ではないAnnaがthe Marsh Houseで出遭うのは、おもちゃではなく1人の少女である。The Marsh Houseを足繁く訪れ、屋敷に行きたいということばかり考えていたAnnaの目の前に、ある日ボートが出現する。まるで、それに乗って入り江を渡り屋敷まで行くようAnnaを誘うかのように、そこに置かれていたのである。ボートなど漕いだことがないAnnaが危うく屋敷の角にぶつかりそうになると、“Quick! Throw me a rope!”<sup>18)</sup>という少女のかん高い声が聞こえる。

She[Anna] looked up. Standing above her, at the top of what she now saw was a flight of steps cut into the wall, was a girl. The same girl as she had seen before. She was wearing a long, flimsy dress, and her fair hair fell in strands over her shoulders as she bent forward, peering down into the boat.<sup>19)</sup>

これが、初めてのMarnieとの対面である。Annaは、Marnieから、ボートを

置いたのはMarnie自身だと聞かされる。友だちになった2人は、毎日のように会い、互いに秘密を打ち明け合ったり、Marnieに連れられthe Marsh Houseのパーティーに花売り娘のふりをしたAnnaがもぐり込んだり、素晴らしい時間を共に過ごす。Annaは、Marnieをこれまで会ったこともないようなきれいな少女だと思う。しかも、孤独なAnnaにとって、Marnieは自分から大好きになると同時に、自分を大好きになる初めての他者である。Marnieは、とてもAnnaに会いたかったことと、いつまでも友だちでいてほしいことを告げる。

“You don’t *know* how much I wanted someone like you to play with! Will you be my friend for ever and ever?” And she would not be satisfied until they had drawn a circle round them in the sand, and holding hands, vowed eternal friendship. Anna had never been happy in her life.<sup>20)</sup>

実際、Annaにとってこれまででいちばん幸せな体験である。Marnieは閉ざされていたAnnaの心を開く存在となる。Annaは、the Marsh Houseを初めて目にして以来、常に屋敷のことばかり考えるようになるが、それと並行して初めて周囲の人と関わりをもつようになる。その結果、「ふつうの顔」を保てなくなったAnnaは感情を動かすのである。近所の女の子との些細な諍いであったり、1人部屋で額の‘good’という文字を眺めながら涙することであったりと、負の感情ばかりであったとしても、何の変化もなく停滞している「無表情」よりは望ましい傾向であるといえよう<sup>21)</sup>。

初めての友だちとの出遭いによって素晴らしい喜びで満たされるAnnaの心を、やがて別離によって深い悲しみと激しい怒りが占めるようになる。Marnieが恐れる風車<sup>22)</sup>を見に行き、何もなかったということを教えてあげようとしたAnnaは、そこで一人ぼっちでいるMarnieに会う。しかも、暗くなってから迎えにきた従兄と共にMarnieは姿を消し、Annaを置き去りにするのである。だが、怒りに燃えるAnnaは、再会したMarnieの必死の謝罪を受け入れる。

“Anna! Darling Anna!”

“What?” she shouted back.

“Anna! Oh, how I wish I could get to you! But I can’t. They’ve locked me in. And they’re sending me away tomorrow. I wanted to tell you — to say goodbye — but they wouldn’t let me out.

“Anna —” she wrung her hands despairingly behind the glass —

“please forgive me! I didn’t mean to leave you all alone like that. And I’ve been sitting up here crying about it ever since. Say you forgive me!”  
. . . suddenly all the bitter grudge she had been feeling against Marnie melted away. Marnie was her friend, and she loved her. Joyfully she shouted back, “Yes! Oh, yes! Of course I forgive you! And I love you, Marnie. I shall never forget you, ever!”<sup>23)</sup>

これまで、周囲の誰も赦すことができなかったAnnaが初めて他者を赦すことから、Marnieへの愛の強さがうかがえる。

ジブリ版『思い出のマーニー』でも、上記の場面が強調されている。<sup>24)</sup> Annaは杏奈という名の日本人の少女に変更されているが、原作でも黒髪であることから違和感なく描かれている。<sup>25)</sup> 文学作品として優れている原作のアニメーション化に苦心した監督の米林宏昌<sup>26)</sup> は、「マーニーの髪は金色以外に想像できなかった」と述べている<sup>27)</sup> が、原作と同じ色の髪をしたMarnieは、夢か現かが曖昧な存在として登場することから、違和感はないといえよう。

### 3. 孤立の意味

休暇中に自宅とは別の場所に一時的に滞在したり、何らかの事情である程度の期間家を離れたりすることによって、異なる空間において子どもが1人で過ごすうち不思議に出遭うという設定はファンタジー作品によく見られるが、この点も、*When Marnie Was There*と1950年代のファンタジーとに共通する要素である。子ども主人公が孤立するという状況は、成長へと向かう前段階として設定されることが多い。弟がはしかにかかったために、しばらく自宅を離れ、共に遊ぶ子どももいなければ適当な遊び場所も近くにないおじとお婆の家に住む羽目になる*Tom’s Midnight Garden*のTomの孤立も、過去の庭や過去に実在した少女との出遭いへとつながる。また、やはり1950年代のファンタジー作品であるCatherine Storr (1913-) 作*Marianne Dreams* (1958)でも、原因不明の病気で一学期間自宅療養を余儀なくされた10歳の主人公Marianneが、昼間の描画が具現化する夢の中で別の少年Markと交流をもち、病の治癒へと向かうが、これも孤立した状況で遭遇する不思議であると考えられる。

Annaが長い夏の休暇を、Londonの自宅から離れたNorfolkにあるLittle Overtonで過ごすことになるのも、喘息で体調を崩し学校も長期欠席したことが原因とされている。だが、じつは、自称「ふつうの顔」(‘ordinary’ look)である「無表情」(‘wooden face’)<sup>28)</sup>によって他者とのあらゆる交流を断っている

ことから、養父母Preston夫妻やBrown医師などの周囲の大人が案じたからである。最初に訪れthe Marsh Houseを見つけた入り江で、Annaには、海鳥の鳴き声が‘Pity me!’というように聞こえる。<sup>29)</sup>密かに自分自身をかわいそうだと考えているAnna自身の心情が反映されたものだとも考えられよう。

Little Overton滞在中、Annaがボートに乗せてもらったことで交流をもつ無口な漁師Wuntermannyの名の由来は、‘one-too-many’すなわち、11人もの子沢山の家庭の「あまりっ子」という意味であることを、AnnaはMr Pegの話から知る。この名の由来には、芸術的な雰囲気をもつ自由な家庭のようでありながら、子どもが多い家族の中で作家自身が子ども時代に感じていた孤独感が反映されているようである。<sup>30)</sup>お金持ちの1人娘として生まれ育つMarnieは一見恵まれているようだが、じつは両親は殆どLondonに滞在していて、あまり自分を大切にしてくれない2人の女中と乳母と暮らす孤独な少女であり、その孤立感が、孤児で養父母に育てられたAnnaの孤独感と呼応したのが、時と空間を越えた両者の出遭いであると考えられよう。<sup>31)</sup>

Marnieと秘密を打ち明け合う時、Annaは、父親には会ったことがなく、母親と祖母も一緒に出かけたきり、交通事故で亡くなり、1人ぼっちになってしまったことを話す。2人にはどうしようもないことであったとしても、Annaは置いて行かれたように感じていたのがある。<sup>32)</sup>しかも、養父母が、実は自分を養育することで国からお金を受けとっていることを偶然知ったAnnaは、誰にも告げることができない深い心の傷を負う。Preston夫妻が親切なことには何の変わりもないのだが、Annaは自分が愛されていないと思い、心を閉ざしていたのである。<sup>33)</sup>その結果が「ふつうの顔」であり、この表情を身につけることで、Annaは周囲の人間と関わらないように過ごしてきた。

Robinsonは、子どもの中には孤立感を抱く者もいるという事実について、7つもの学校へ通ったがいずれでもうまくいかなかったという自身の体験と照らし合わせ、次のように述べている。

“... one develops some small line of one’s own which somehow sidesteps the competitive world. I drew . . . Much went into it[the novel] of the solitary child for some of us are always solitary children.”<sup>34)</sup>

周囲の人々との間に線を引き、常に輪の「外側」(outside)にいると感じるAnnaは、上記が反映された主人公であるといえよう。

Marnieが姿を消すことは、現在周囲にいる人間との交流と謎の解明へとAnnaを誘う。やがてAnnaは、現在のthe Marsh Houseを購入して移転してき

たLindsay一家と親しくなり、友だちになった少女Priscillaから、過去にその屋敷に住んでいたMarnieが遺した日記を見せてもらう機会を得て、Marnieが実在していたことを確認する。さらに、生前のMarnieと交流があったGillyを交え、Lindsay家の人々と話すうち、Annaは自分の本当の名はMariannaであり、Marnieが実は自分の祖母の少女の頃の姿であったことを知る。女中たちから粗雑な扱いを受けただけでなく両親の愛も知らず育ったMarnieは、娘のことは愛そうとしながら方法が分からないため愛せなかった。Gillyは、愛することが人の成長には不可欠だということについて、“Being loved, oddly enough, is one of the things that helps us to grow up. And in a way Marnie never grew up.”<sup>35)</sup>と言っている。だが、時と空間を越えて出遭った孫娘には、Marnieも初めて、心からの愛情を示したのである。

Marnieに関する事実を知るうちに、Annaは、初めて、Mrs PrestonをLittle Overtonに呼び、the Marsh Houseを見てほしいと願うようになる。過去の少女との出遭いにより、知らないうちに家族から愛され自分も家族を愛したことを悟り、初めての愛する体験を経て1人ではないと知った少女は、閉ざし続けていた心を開き成長を遂げたのである。

## 註

- 1) Humphrey CarpenterとMari Prichardは、共著*The Oxford Companion to Children's Literature* (Oxford: Oxford UP, 1999) で、*Teddy Robinson* シリーズをRobinsonの代表作として紹介している。(p. 457)
- 2) Anne Commire著*Something About the Author: Facts and Pictures about Contemporary Authors and Illustrators of Books for Young People* 第7巻 (Detroit: Gale, 1975) 収録のRobinson自身の見解によると、10歳から12歳くらいの読者を想定して書かれた作品である。(p. 184)
- 3) Marcus Crouchは、著書*The Nesbit Tradition: The Children's Novel in England 1945-70* (London: Ernest Benn Ltd, 1972) で、*When Marnie Was There* について、「児童文学の中で他にはほぼ類を見ないような方向性を寄与した」作品として、以下のような高い評価を述べている。

The book marks a change of direction almost without parallel in children's literature. It is a most beautiful and sensitive examination of a little girl and of the landscape which works so powerfully upon her. (p. 209)

- 4) Sheila Egoffは、著書*Worlds Within: Children's Fantasy from the Middle Ages to Today* (New York: American Library Association, 1988) で、1950年代がファンタジーの歴

- 史において、ヴィクトリア朝三大ファンタジーが生まれた時代に並ぶ重要な時代であることを指摘し、C. S. Lewis (1898-1963) の *The Chronicles of Narnia* (1950-57) や J. R. R. Tolkien (1892-1973) の *The Lord of the Rings* (1954-55) のような叙事詩的なハイファンタジーの名作や、Mary Norton (1903-92) の *The Borrowers* (1952) のような徹底してミニチュアの世界を描いたファンタジーに加え、過去と現在をつなぐファンタジーをこの時代の代表的作品として挙げている。
- 5) さくまゆみこ著『イギリス 7つのファンタジーをめぐる旅』(東京印書館、2000年)によると、現在でも Boston の息子夫婦が在住して見学可能である。(p. 130)
  - 6) 三宅興子は、『イギリス児童文学論』(楡林書房、2001年)の中で、イギリス児童文学における「古い館」の重要性について指摘しているが、1950年代の代表的なファンタジー作品に加え、1930年代の Alison Uttley (1884-1976) の *A Traveller in Time* (1939) や 1960年代の *When Marnie Was There* も作品例に挙げている。(p. 317)
  - 7) Joan G. Robinson, *When Marnie Was There* (London: HarperCollins Children's Books, 2002), p. 25.
  - 8) 『本へのとびら——岩波少年文庫を語る』(岩波新書、2011年)では宮崎駿が愛読書 50冊を中心に岩波少年文庫所収の児童文学作品について語っているが、*When Marnie Was There* の邦訳版『思い出のマーニー』については、「この本を読んだ人は、心の中にひとつの風景がのこされます。入江の湿地のかたわらに立つ一軒の家と、こちらを向いている窓」とあり、時を経てもこの家の記憶は消えないとしている。(p. 29)
  - 9) 宮崎駿も高畑勲も関わらなかったジブリ映画『思い出のマーニー』については、興行収入こそ従来の4分の1程度ではあったものの、「むしろ彼ら [宮崎・高畑] のアニメーション技法と画面主題を継承するもの」(上島春彦「東映動画からジブリへ、さらにジブリ新時代へ。アニメーター魂は受けつがれる」『キネマ旬報』2014年8月上旬号、p. 52)とされ、友情の物語を伝えるに充分な細部まで行き届いた映像技術を認められ (Peter Deburge, “Film Review: When Marnie Was There.” *Variety* 16 December 2014 <<http://variety.com>>), 効果的な構成について指摘され (Christopher O’Keeffe, “Review: When Marnie Was There, Ghibli Enters A New Age With A Melancholic Ghost Story.” *Twitchfilm*, July 2014 <<http://twitchfilm.com>>), 繊細で手作り感のある作品としてと称賛される (“‘When Marnie Was There’ (‘Omoide no Mani’): Film Review.” *The Hollywood Reporter* 4 November 2014 <<http://www.hollywoodreporter.com>>; Mark Schilling, “Omoide no Marnie (When Marnie Was There).” *The Japan Times* 9 July 2014 <<http://www.japantimes.co.jp>>) など、評価を得ている。
  - 10) 本作品の監督、米林宏昌は、the Marsh House も登場人物の1人であるというような意識をもって再現したと述べている。(Moe 2014年9月号、p. 17) また、実写映画の監督として知られ、本作で初めてアニメーション映画の美術監督を務めた種田陽平も、the Marsh House を「この映画の主役の様な存在」ととらえている。(スタジオジブリ編『思い出のマーニー』p. 47) さらに、映画の空間を創り出すために、実際の洋館にはあまり見られない石造りの雰囲気やマーニーの窓には採用し、原作

では普通の窓でも支障ないが「映画的に強調した方がよいと考え」出窓にしたとある。(『思い出のマーニー ビジュアルガイド』2014年、p. 69)

- 11) 後述される風車小屋の場面では、場所がサイロに変更されている。スタジオジブリ編『思い出のマーニー』(徳間書店、2014年)によると、米林は、北海道ではサイロをよく見かけたことから、「石造りのゴツい感じで、西洋の塔みたいなので、こういうものならば風車の代わりにいけるかもしれない」と考えたそうである。(p. 24)
- 12) 『思い出のマーニー×種田陽平展』(角川書店、2014年)、p. 45.
- 13) Young Puffinの‘Read Aloud’すなわち読み聞かせに適した本の中に含まれていることから分かるように、ペーパーバック版によると、*Teddy Robinson* シリーズは「4歳から読める (from four)」とされている。
- 14) Joan G. Robinson, *About Teddy Robinson* (Middlesex: Puffin Books, 1975), p. 15.
- 15) *Mary-Mary*では、兄と姉がこぞってMary-Maryの幼児らしい言動を批判しても、例えば以下のように、Mary-Maryが臆することなく自作自演で味方を得ようとする様子が、しばしば描かれる。

“Moppet knows there was a snow giant,” said Mary-Mary. “Don’t you, Moppet?”  
Then she squeaked, “Yes,” in Moppet’s voice. (p. 81)

- 16) Donald Woods Winnicott, *Playing and Reality* (London: Tavistock Publications, 1971) 母親から離れるという喪失感から幼児を守り、初めて他者を愛するという経験を提供する「過渡の対象」は、常に幼児が手放すことなく傍らに置きたがるような、手ぎわりのよいあたたかな毛布やぬいぐるみであることが多い。(pp. 2-5) Winnicott理論とWinnie-the-Poohについては、拙著『A・A・ミルン』(KTC中央出版、2003年)の第2部第4章に詳述されている。
- 17) Elizabeth Wright, *Psychoanalytic Criticism: Theory in Practice* (London: Routledge, 1993), pp. 93-4.
- 18) Robinson, p. 62.
- 19) *Ibid*, p. 77.
- 20) *Ibid*, p. 128.
- 21) 河合隼雄は『子どもの本を読む』(楡出版、1994年)において、このようなAnnaの変化を、「アンナの心が今までと違って、感情で満たされていることを喜ぶべきである」と指摘している (pp. 80-1)
- 22) Robinsonの娘Deborahが書いた*When Marnie Was There* (2002)の「あとがき」によると、この風車も類似のものが実在する。(pp. 284-5)
- 23) Robinson, pp. 162-3. 下線筆者。
- 24) 三浦しをんは、「「いま」を生きるすべてのひとに」の中で、2人の少女の「許す」という言葉のやり取りに、たとえ大切な人であっても、裏切ったり裏切られたりした経験を余儀なくされたすべての人が、「いつまでも抜けない棘の痛みが一瞬やわらげられ」ることを指摘する。(『思い出のマーニー』映画パンフレット角川書店・

東宝、2014年)

- 25) 上野は前掲の記事で、敢えて揺らさないよう配慮された杏奈の髪の毛による表現を指摘する。また、切通理作は、「スタジオジブリが描いてきた少女たち」で、心を閉ざす少女と閉ざされた場所で生きた過去の少女とを主人公に選んだことを評価している。(『キネマ旬報』 pp. 54-5)
- 26) *Cut* 2014年8月号、pp. 20-1.
- 27) *Moe*, p. 17.
- 28) Annaが意識的に保とうとするこの表情については、以下のように描写されている。

Mrs Preston, seeing Anna's 'ordinary' look — which in her own mind she thought of as her 'wooden face' — sighed . . . With luck, if she[Anna] looked 'ordinary' no-one would speak to her in all that time. (Robinson, pp. 8-9. 下線筆者)

- 29) *Ibid* pp. 24-5.
- 30) Deborah Robinson, 'Postscript' of *When Marnie Was There* (2002), p. 282.
- 31) 河合は、前掲書の中で、AnnaとMarnieの出遭いと必然的な別離とを、「心と体を越える第三領域」すなわち「たましい」の働きによるものだと述べている。(pp. 18-9)
- 32) Robinson, pp. 123-4.
- 33) *Ibid*, pp. 124-6.
- 34) Commire, p. 184.
- 35) Robinson, p. 244.